

加齢難聴と補聴器を考える



加齢に伴う難聴を患う人は1500万人を超えると推定されている。割合でいうと、じつに「65歳以上で3割、75歳以上で半数」。一方で、補聴器の販売台数は年間約55万台と低い水準だ。なぜ補聴器を買わないのか。そして私たちは加齢難聴とどのように付き合っていけばいいのだろうか。様々な側面から考えていく。

「早めの補聴器装用を」

戸塚区の補聴器職人・大槻さんインタビュー

簡単 おみみチェック

- 会話中に「え?」「なに?」とよく聞き返す。
- 急に話題が変わると、しばらく話がわからない。
- 早口の人やこもり声の人の話が聞きとれない。
- 家族から「テレビの音大きい」と言われる
- 声は聞こえるが、意味がはっきりしない
- 1対1の会話はよいが複数だと聞きとれない

ひとつでも当てはまったら早めの相談を

「補聴器は、できるだけ早い時点でつけ始めた方が「結果的には楽」」。大槻さんはそのように呼び掛ける。理由は大きくわけて、「装着(身に付けること)に慣れるため」「円滑な会話やコミュニケーションを保つため」のふたつだ。

装着に慣れる
大槻さんによると、補聴器は的確に耳に取り付

「だれもが思う可能性がある「加齢難聴」。聴こえが悪いと、不安や孤独感など心理的にも悪い影響が出てしまう。一方で、装用の恥ずかしさなどから「なかなか手を出せない」という人も多い。自身も難聴を患う戸塚区下倉田町の補聴器職人・大槻公孝さんに、補聴器の必要性や購入時期について話を聞いた。

「指先の機能や認知機能が衰えてきてからでは、小さな補聴器を耳に取り付ける作業を覚えるのは難しい場合がある。一方で、若い頃に一度身に付けた技術はなかなか忘れにくいもの。早めに装着に慣れておくことがとても大切」と話す。

円滑な会話のため
耳の機能が衰えると、どうしても「え?」「なに?」と聞き返すことが多くなる。「本人にとっては何度聞き返すのは気が引けますし、周りの人もおっくうになります。そ



丁寧に補聴器の説明をする大槻さん

うして家族や友人との会話が少しずつ減っていく……そんな相談が私のもとに多く寄せられています」と話す。

また自分が加齢難聴であることに気が付かず、知らない間に家族や周りの人と疎遠になる……という場合もあるという。大槻さんは「まずは自身が難聴かどうかを知ることを大切」とし、左上図の「簡単おみみチェック」と呼び掛ける。

聴こえに喜びの笑顔
県外からの来店者も

男性はウェブで同店の存在を知り、意を決して来店。大槻さんに相談したところ「あなたよりも私の方が聴力が悪いですよ」という言葉が返ってきて男性は驚いたという。大槻さんは聴力データをもとに補聴器を調整。男性の耳に取り付けると硬かった顔がみるみる和らいだ。「聴こえるよ!」。その満面の笑顔を大槻さんは忘れられないという。

「この笑顔がやがて、これからも一人でも多くの人に聴こえを届けたい」と大槻さんは話す。

「補聴器は恥ずかしいという文化がある」と大槻さん。その理由を、難聴が年寄りじみていると考える人がまだまだ多いからと分析する。目が悪ければメガネをかけることと変わらないことだと思っただけ、補聴器を早くにつけ、より充実した生活を送ってもらえればと呼び掛ける。

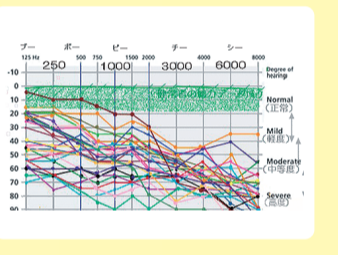
コラム① 補聴器は楽器である!

「高額な補聴器を買ったのにぜんぜん聴こえない」という経験はないだろうか。原因は様々だが、理由のひとつに「しっかりと装着できていない」ことがある。

リコーダーやフルート、トランペットなどの管楽器を想像してほしい。一度でも手に取ったことのある人ならわかると思うが、指の押さえ方や吹き方が少しでも甘いと、きれいな音は鳴らない。補聴器も同じで、しっかりと装着できていないときれいな音が聴こえないのだ。楽器の例をそのままつかえば、「補聴器店が楽器職人、補聴器使用者は楽器演奏者」といえる。補聴器を購入した際は、装着の方法もしっかりと身に付けていくことが大切だ。

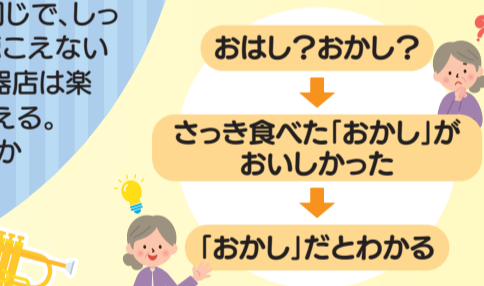
どうして聴こえなくなるの?

聴こえが悪くなるのは様々な理由がある。音の伝わり、電気信号への変換、電気信号の伝わり、脳での理解…このうちどれかがうまく行かなくなると難聴になってしまう。加齢難聴の原因は一般的に、蝸牛という器官内の「有毛体」が損傷することによるとされる。有毛体が損傷すると、特定の周波数の音が電気信号に変換されず聴こえにくくなってしまふ。損傷箇所によって聴こえ方の変化は千差万別=右データ参照。だからこそ補聴器店による細やかな聴力測定が必要なのだ。



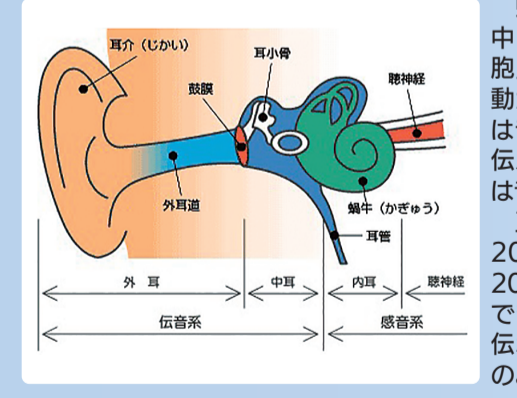
なぜ自分の聴力低下に気づきにくいのか?

加齢難聴は、高い周波数の音が聴こえづらくなる傾向がある。この場合に困るのが、「子音」の聞き分けだ。つまり「か行」「さ行」「た行」などの聞き分けがしづらくなってしまふ。だが人間の脳はとても優秀で、この弱点を補ってくれる性質がある。たとえば「おはし」と「おかし」など、語感の似ている言葉が聞き分けられなかったとしても、脳が前後の文脈をくみ取り、補ってくれるのだ。つまり、「さっき食べた「おかし」がおいしかった」は意味が通るが、「おはし」がおいしかった」は明らかにおかしい。そう脳が判断するため、私たちは「おかしのことだ」とすぐわかることができる。一方でこの優秀な脳の機能は、「自分の聴力低下に気づきにくくなる」という問題も同時に引き起こしてしまう。



耳の構造を知ろう

「耳介」は私たちにとって理想的な集音器で、いろいろな方向から来る音をじょうずに外耳道に誘導し効率よく鼓膜を振動させることができる。鼓膜の振動は、みっつの小さな骨から成る「耳小骨」に伝わり、効率よく「蝸牛」に伝わる。



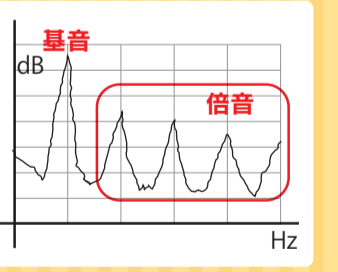
蝸牛にはリンパ液が満たされており、その中には根元が聴神経につながった「有毛細胞」が並んでいる。耳小骨から伝えられた振動がこの有毛細胞を震わせることで、聴神経は音を電気信号に変換して脳の聴覚中枢に伝え、脳がこの信号を理解することで、私たちは音や言葉を聞き、理解することができる。

正常な耳で特に聴こえのいい人は1秒間に20回の振動の音(20ヘルツ)から、1秒間に20000回(20000ヘルツ)までを聴くことができる(個人差あり)。この範囲の音が脳まで伝わると、ささやくような小さな音から大声のような音までを聞きわけることができる。

コラム② ちょっと専門的なはなし

世の中のほとんどの音には「倍音」が混ざっている——。いきなりの難しい言葉に戸惑うひとも多いかもしれない。たとえばピアノの鍵盤で「ド」を鳴らしたとき、わたしたちには「ド」の音だけが聴こえるように感じるが、実際には「ド」以外の高い音が鳴っているのだ。より詳しく言えば、鳴らしている音(基音)の2倍、3倍、4倍…の高い周波数を持った音(倍音)が、混ざっている。そしてこの「倍音」は、人間の声にも混ざっており、人の声や響きを特徴づける大切な役割を持っているとされている。

倍音が聴こえないと…
加齢難聴の場合、1000ヘルツを超える高い周波数の音が聞きとれなくなるケースが多い。これは、「基音は聞こえるけれど倍音が聴こえない」という状態だ。わたしたちは倍音から「声の特徴」や「響き」などじつに多くの情報を得ている。これが聴こえないと、だれがどこで、どのような調子で話しているのか、掴みづらくなってしまふのだ。



「聴こえの悩みは当店へ」 補聴器専門店 おみみショップ

戸塚区下倉田町244-1 第八山仁ビル1階
☎045(861)8984

http://www.omimi.jp/
(営)日曜日・月曜日
および祝祭日以外
午前10時~午後6時



大切な補聴器のお手入れ



補聴器の技術進歩は目覚ましい。しかし高度で繊細な器具であるからこそ、手入れをしっかりとしないとすぐに聴こえに影響してしまふ。補聴器の最大の敵は「耳アカ」だ。上の「コラム①」にもある通り、音を拾ったり振動を伝える部分が少ないでもふさがると、とても大きな影響が出てしまふ。

耳アカなど付着した汚れを、自宅で効率よく理想的に取り除くことができる吸引式クリーナーが販売されている=左写真。水道水をフィルタとして用いるので経済的。また吸入した耳アカなどの乾燥微粉末が室内に吐き出されず清潔だ。耳の一部として活躍する補聴器。しっかりしたケアをして、長く使っていきたい。